

平成 21 年 6 月 15 日

世田谷区長 熊本哲之 殿

世田谷区本庁舎等整備審議会会長 照井進一 殿

社団法人 日本建築学会関東支部

支部長 新宮清志

世田谷区民会館および第一区庁舎の保存に関する要望書

拝啓 ますます時下ご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃より本会の活動につきましては多大なご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、貴区では現在、防災対策および区民サービスなどの観点から、区民会館および第一区庁舎の建て替えを検討中であると聞き及んでおります。またその経緯については、貴区のホームページ上に掲載された「世田谷区本庁舎等整備審議会」の議事録などで拝見させていただいております。

ご存知のように、世田谷区民会館および第一区庁舎は、ともに前川國男（1905～1986）の設計、大成建設の施工により建設された鉄筋コンクリート造の建物で、区民会館は地下 1 階・地上 2 階建てで 1959 年 3 月に竣工し、第一区庁舎は地下 1 階・地上 5 階建てで 1960 年 9 月に竣工したものであります。

世田谷区民会館および第一区庁舎は、別紙「見解」に示しました通り、1950 年代の東京都区部に建てられた区民会館（公会堂）・区庁舎を代表する建物であるとともに、区民会館はその現存する唯一の建物という点で貴重であり、またその設計に際して前川國男がモダニズムの手法を駆使し、「広場」を施設を中心に据えた「郊外の地域文化施設」としてのあり方を示した最初期の事例という点で、日本の近代建築史上、極めて価値の高い建物といえます。他区の同種の施設が続々と建て替えられて行く中、貴区の施設が現在まで区民に親しまれ、文化遺産として有効に活用されてきた背景には、設計者である前川國男が採用した「広場」中心の施設構成が、戦後の世田谷区民の多様な文化活動を受け入れることに成功し、また区民もこの広場の価値を理解して有効活用してきた、という両者の良好な関係があったと推察されます。また、その設立に当っては、地元有志から 3,000 坪の土地の提供がなされたほか、資金も地元民が集めた寄付金 1,000 万円を基に、代々の区長が 26 年間かけて予算の余剰金を積み立ててきた、という地道な努力があったことが当時の新聞に紹介されています。

貴下におかれましては、この貴重な建物の持つ歴史的価値についてあらためてご理解いただき、建物の取り壊しを見直していただくとともに、このかけがえのない文化遺産の価値を最大限に考慮した保存改修を行っていただけますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。

なお、日本建築学会関東支部といたしましては、この建物の保存に関してできる限りのご協力をさせていただき所存であることを申し添えます。

敬具

2009年6月15日

世田谷区民会館および第一区庁舎についての見解

社団法人 日本建築学会関東支部
歴史意匠研究専門委員会
主査 山崎鯛介

東京都世田谷区世田谷 4-21-27 に建つ世田谷区民会館および第一区庁舎は、既存の区役所の敷地と隣地を併せた敷地に建設され、それぞれ区民会館は1959年3月に竣工（4月開館）、第一区庁舎は1960年9月に竣工した。敷地面積は11,378.3㎡で、竣工時の規模・構造形式は、区民会館が地下1階・地上2階の鉄筋コンクリート造で延床面積が4,891㎡、第一区庁舎は地下1階・地上5階の鉄筋コンクリート造で延床面積は8,305㎡であった。建物の設計は、区民会館と第一区庁舎を併せた計画が4社（日建設計、佐藤武夫、山下寿郎、前川國男）による指名設計競技として行われ、その結果、前川國男（1905～1986）に設計監理が委託された。施工は、区民会館・第一区庁舎ともに大成建設が担当した。

敷地は、東側・北側・西側の3方を道路に面するやや北すぼまりの三角形状で、建物は敷地境界に沿って分棟で配置された。すなわち、敷地南側には区民会館のオーディトリウム（固定席数1,294名）を、東側には道路に面してピロティを持つ2階建ての横長の低層棟を配置し、さらに低層棟の西端部に接して第一区庁舎が敷地の北側に建設された。こうした建物配置によって、敷地中央部には大きな「広場」が確保された。区民会館は「世田谷区民の多様な文化活動に供する複合施設」として計画され、オーディトリウムの他に、図書閲覧室・書庫、食堂・厨房、結婚式場・披露室、展示場（間仕切りにより集会室としても使用）、講習室などが設けられた。

建物の現状は、オーディトリウムの内装およびホール階段廻りの一部に改修が施されているが、全体として目立った増改築は行われておらず、竣工時の建物の状態を良く伝えている。第一区庁舎については、耐震補強のブレースが外観上目立つものの、他には目立った増改築は行われておらず、後世の業務拡大に伴う床面積の不足に関しては、これまで第二区庁舎の隣接地への新築（1969年、前川國男設計）などによって対応してきた。

世田谷区民会館および第一区庁舎の持つ建築史的価値は、大きく以下の2点に認められる。

1. 1950年代に東京都区部に建てられた区民会館（公会堂）の代表的建物としての価値

戦後の東京都区部では1950年代を通じ、各区において同種の文化施設（区立の公会堂）が競って建設された。それぞれの竣工年（豊島区：1952年、大田区：1954年、中野区：1955年、板橋区：1955年、品川区：1956年、大田区：1956年、杉並区：1957年、葛飾区：1958年、文京区：1959年など）を見ると、世田谷における区民会館の建設は、最も遅いものの一つであった

ことがわかる。世田谷区民会館の建設経緯について、当時の新聞記事（毎日新聞、1958年4月4日）を見ると、敷地のうち3,000坪は同区羽根木町の地主・芹沢新平氏の寄贈によるものであり、また、総工費1億6,500万円については、昭和7年の世田谷区発足（世田谷・玉川・松沢・駒沢の4町村合併）以来、地元民の寄付金1,000円を基に、毎年の区予算の剰余金を積み立て、更に昭和31年からは会館特別予算として毎年2,000万円を用意するなどして、26年間かけて積み立てたものであったと書かれている。戦後の地域文化施設は、市民（区民）や市長（区長）の大きな期待を背負って建設されたと考えられるが、こうした世田谷区民会館の建設経緯は、この建物がそうした点において象徴的な作品であることを示している。こうした先人の努力を後世に伝え、区民の住民参加意識を高めて行くためには、建物が実在することが必須の条件と考えられる。

また、このように地道な資金計画で建設された世田谷区民会館ではあるが、建設された建物は延床面積が4,891㎡で、杉並区（5,669.4㎡）、文京区（5,412㎡）に次いで3番目に大きく、オーディトリウムの固定座席数1,294席は文京区（2,000席）に次ぐ2位であり、総工費も2,100万円で杉並区（2,547万円）に次いで2番目に大きいなど、建物としては1950年代に東京都区部に建てられた数多くの区民会館（公会堂）を代表する本格的な施設であった。なお、1950年代に建てられたこれらの施設については、世田谷区民会館を除いていずれも既に建て替えられ現存していない。

以上のように、世田谷区民会館は、その建設経緯自体が戦後の地域文化施設の理想的なあり方を示しているという点において、また、そうして建てられた1950年代の東京都の地域文化施設の代表であり、かつ唯一の現存する建物という点において、極めて重要な建築史的価値を持つ建物といえる。

2. モダニズムの設計手法による地域文化施設の提案／「広場」を中心とした分棟型の構成

市民会館・区民会館といった地域の文化施設は、戦後の地方自治体制を象徴する建築タイプとして1950年代に全国に数多く建設された。しかし、同時期には大都市に民間の文化施設（東横ホール・1954年など）も建てられており、「地域文化施設」としての役割は当時、必ずしも自明ではなかった。例えば1950年代に東京都区部に建てられた公会堂のうち、杉並区公会堂（1957年7月竣工、設計：日建設計）と文京区公会堂（1959年4月竣工、設計：佐藤武夫）は、延床面積その他の点において世田谷区民会館と並ぶ本格的な地域文化施設であるが、その設計内容を比較すると、文京区と杉並区の公会堂では建物の用途を「音楽ホール」に特化し、また当時としては例外的に駐車場を完備するなど「都心の娯楽施設」としての性格を前面に押し出していたが、世田谷区民会館は、オーディトリウム以外にも結婚式場や図書閲覧室、展示場を含むなど「区民の多様な文化活動に供する場」として計画された。

こうした地域の文化施設にふさわしい建築形式として前川事務所が提案したのは、建物を分棟にして敷地周囲に配置し、敷地中央部に広く区民の集う「広場」を確保することであった。ここでは第一区庁舎もまた広場を構成するための要素として位置づけられており、中庭型や分棟型といった記念性を強調しない設計手法は、当時の庁舎建築の設計手法と比較して異例であ

り、設計者の意図が強く表現されたものといえる。

前川はまた、個々の建物の設計や全体の関係性を構築するにあたり、モダニズムの設計手法を駆使している。すなわち、分棟型で計画されたオーディトリウム、低層棟、第一区庁舎という 3 つの建物では、折版構造、ピロティ、プレキャスト・コンクリート、打ち放し仕上げといった鉄筋コンクリート造に特有の表現方法が試みられた他、こうした個々の特徴的な建物を相互に関係づけるにあたって、ピロティや大空間のホワイエ、水平感を強調するように 2 階レベルに廻されたデッキといったモダニズム建築の手法を用いている。こうした広場中心の構成を持つ文化施設としては、前川事務所がほぼ同時期に京都の閑静な東山地区に設計した京都会館（1960）がある。

以上のように、世田谷区民会館・第一区庁舎の全体構成は、前川國男がモダニズム建築の手法を駆使し、「広場」を中心に据えて郊外の地域文化施設のあり方を示した最初期の事例として日本の近代建築史上、重要な価値を持つものといえる。